

かかさんとの乳

いで うみ 絵・宮沢 千賀



ギリシャ人を母に、アイルランド人を父にもつたハーン先生が日本にやつて来たのは、江戸が東京になつて二十年ぐらいたつ頃でした。男の人の頭のちゃんまげは、ほとんどなくなつていきましたが、まだ多くの人が着物を着て、草履をはいている時代でした。

その頃のたばこは、きせるという道

て、天秤棒をかつぐ羅宇屋の父親は、口元のしわすらやせて、年齢以上に歳をとつて見えました。

箱の中の赤ん坊のまわりには、いくつかのおもちゃがありました。きっと、だれかれとなく、かわいいこの子に与えたものでしよう。

そんな中に、いつも必ず、一枚の木の板に少し厚めの台木がついた、お位牌のようなものがありました。

半年ほどたつたころ、ハーン先生は、この羅宇屋がいつもの天秤ではなく、たぶん自分で用にあつられたと見られる、手押し車を押してくるのに会いました。

手押し車の上には木枠がとりつけられ、それは前後に区切られていて、前の枠には新しい羅宇や仕事道具が、後ろの枠にはあの赤ん坊が、以前と同じように、布にくるまって入つていました。

子どもが大きくなつたので、肩にかつぐには重くなつたんだな生は、ほほえましく思いました。

先生

しばらくして、羅宇屋の手押し車が門の前にきました。

あの赤ん坊は、外国人の先生の顔を見ても、あやしむでもなく、あどけない笑顔と、だれをも信頼するまっすぐな目で、先生を見つめました。

家から何本かのきせるが届くと、羅宇屋は「じゃ、仕事にからせてもらいます」と言つて、車の前にまわり、人々と作業の準備を始めました。

いの太さの竹の管でできていました。この管の内側に、たばこのやにがたまり、掃除しても、たばこの味に臭い匂いが残つてしまつようになります。そこで、羅宇を掃除したり、新しい羅宇にすげ替えたりする職業がありました。羅宇屋といいました。

日本に来て何年かたつたある日、ハーン先生は、天秤棒をかついで家の前に通る羅宇屋の、つり下げる箱の中を見て、つい、ほほーと声を出しそうになりました。赤ん坊が入っていたのです。その日から先生は、この赤ん坊を連れた羅宇屋に会うのが、楽しみになりました。赤ん坊は、布にくるまつて寝ている時は、そこに優しい花の香が漂うようでした。起きている時はいつも、そこにだけぽつかり日があたつていて、煙を吸うところです。

真ん中の煙の通るところを、羅宇といました。羅宇の多くは、鉛筆ぐら



をにぎつたりしていましたが、ふと思
い出して、例の板に目をやりました。
それはやはりお位牌でした。

先生がじつとそれを見ていると、万
右衛門が言いました。

「そのお位牌は、きっと、この子の母
親のものです。」

「うん、で、ここに書かれた漢字の意
味は何だろ？」

先生が聞くと、万右衛門は、お位牌
に近づいて、その字を読み取って言
いました。

「極楽へ行つて、みんなに尊敬される
ようになつてゐる女人の人」というよう
な意味です」

親のものです。」

「うん、で、ここに書かれた漢字の意
味は何だろ？」

先生が聞くと、万右衛門は、お位牌
に近づいて、その字を読み取つて言
いました。

「極楽へ行つて、みんなに尊敬される
ようになつてゐる女人の人」というよう
な意味です」

親のものです。」

「うん、で、ここに書かれた漢字の意
味は何だろ？」

先生が聞くと、万右衛門は、お位牌
に近づいて、その字を読み取つて言
いました。

「極楽へ行つて、みんなに尊敬される
ようになつてゐる女人の人」というよう
な意味です」

親のものです。」

「うん、で、ここに書かれた漢字の意
味は何だろ？」

先生が聞くと、万右衛門は、お位牌
に近づいて、その字を読み取つて言
いました。

「極楽へ行つて、みんなに尊敬される
ようになつてゐる女人の人」というよう
な意味です」

親のものです。」

「うん、で、ここに書かれた漢字の意
味は何だろ？」

先生が聞くと、万右衛門は、お位牌
に近づいて、その字を読み取つて言
いました。

「極楽へ行つて、みんなに尊敬される
ようになつてゐる女人の人」というよう
な意味です」

親のものです。」

「うん、で、ここに書かれた漢字の意
味は何だろ？」

先生が聞くと、万右衛門は、お位牌
に近づいて、その字を読み取つて言
いました。



ハーン先生の家で働いてゐるこの万
右衛門という年寄りは、だれからで
も慕われていて、一度でも会えば、す
つと親しくしていいたいと思うようにな
る、ふしきな老人でした。

それは、万右衛門が、人間を超
た大きな力を信じていることと、自分
のことはいつも二の次に考える生き方
をしているからだろう。先生はこう思
い、その生き方を尊いものだと思つ
ていました。

その万右衛門が、一心に作業してい
る羅宇屋に声をかけました。

「このお位牌は、おまえさんのお連れ
のものだらうね」

「はあ、この子が生まれて、ちょっと
にか月日でした」

「二か月、そりや、つらい思いをな
つた」

「ええ」

「それから、ずっと、赤ん坊を連れて
歩いていなさるかね」

「いや、死なれて半月ほどは、家でわ
しが見ていたんですが、いつまでも子
守をしていることもできず」

「うん」

「かといつて、赤ん坊を世話をしてくれ
る乳母を雇う金も、ありません。それ
で、こゝうして子どもを連れて」

「そりや、たいへんだねえ。でも、ど
うしてお位牌もいつしかね」

「実は、羅宇屋は手を持った小刀を、
と言つて、羅宇屋は手を持った小刀を、
作業していた台の上に置き、こんな話

「先生が、目を丸くして言いました。
『そんな、羅宇屋さん、こんなに丈夫
に、元気にはつきり育つてゐるのは、死んだこの
子のかかさんが、乳を飲ませてゐるか
らです。この子はこれからも、乳が足
りずに弱ることもありますまい』

「そして、赤ん坊に向かつて言いま
した。『のう、坊、そうだのう』

木梓の中の赤ん坊が、笑いました。

まるで、そこに、かかさんがいるか
のように。」

すると、万右衛門がお位牌をやさし
く見つめながら言いました。

「いいや、それはちがいます。この子
が立派に育つてゐるのは、死んだこの
子のかかさんが、乳を飲ませてゐるか
らです。この子はこれからも、乳が足
りずに弱ることもありますまい』

「そして、赤ん坊に向かつて言いま
した。『のう、坊、そうだのう』

木梓の中の赤ん坊が、笑いました。

まるで、そこに、かかさんがいるか
のように。」

羅宇屋は手を止めて顔を上げ、ちょ
と万右衛門を見てから、口元に懐か
しさをふくませて答へました。

「ええ、かかの位牌です」

「いつだね、おかみさんがなくなつた
のは」

「はあ、この子が生まれて、ちょっと
にか月日でした」

「二か月、そりや、つらい思いをな
つた」

「ええ」

「それから、ずっと、赤ん坊を連れて
歩いていなさるかね」

「いや、死なれて半月ほどは、家でわ
しが見ていたんですが、いつまでも子
守をしていることもできず」

「うん」

「かといつて、赤ん坊を世話をしてくれ
る乳母を雇う金も、ありません。それ
で、こゝうして子どもを連れて」

「そりや、たいへんだねえ。でも、ど
うしてお位牌もいつしかね」

「実は、羅宇屋は手を持った小刀を、
と言つて、羅宇屋は手を持った小刀を、
作業していた台の上に置き、こんな話

「先生が、目を丸くして言いました。
『そんな、羅宇屋さん、こんなに丈夫
に、元気にはつきり育つてゐるのは、死んだこの
子のかかさんが、乳を飲ませてゐるか
らです。この子はこれからも、乳が足
りずに弱ることもありますまい』

「そして、赤ん坊に向かつて言いま
した。『のう、坊、そうだのう』

木梓の中の赤ん坊が、笑いました。

まるで、そこに、かかさんがいるか
のように。」

すると、万右衛門がお位牌をやさし
く見つめながら言いました。

「いいや、それはちがいます。この子
が立派に育つてゐるのは、死んだこの
子のかかさんが、乳を飲ませてゐるか
らです。この子はこれからも、乳が足
りずに弱ることもありますまい』

「そして、赤ん坊に向かつて言いま
した。『のう、坊、そうだのう』

木梓の中の赤ん坊が、笑いました。

まるで、そこに、かかさんがいるか
のように。」

「そして、赤ん坊に向かつて言いま
した。『のう、坊、そうだのう』

木梓の中の赤ん坊が、笑いました。

まるで、そこに、かかさんがいるか
のように。」

「そして、赤ん坊に向かつて言いま
した。『のう、坊、そうだのう』

木梓の中の赤ん坊が、笑いました。

まるで、そこに、かかさんがいるか
のように。」